

戯曲「ロミオとジュリエット」の 読者感想文のテキストマイニング

和光大学

現代人間学部 心理教育学科

19P109

埴谷梨奈

目次

1	問題	3
1.1	はじめに	3
2.	目的	3
2.1	仮説	4
3.	方法	4
3.1	分析対象	4
3.2	分析方法	5
3.3	倫理的配慮	5
4.	結果	5
4.1	基本情報	5
4.2	単語頻度解析	6
4.3	ことばネットワーク	8
4.4	特徴表現抽出	10
5.	考察	12
6.	おわりに	13
7.	謝辞	14
8.	文献	14

1 問題

1.1 はじめに

『ロミオとジュリエット』とは、16世紀～17世紀頃に活躍したイングランドの劇作家ウィリアム・シェイクスピアが1595年に書いた劇作品である。本作では、名家モンタギューの一人息子ロミオが、敵対する名家キャピレット家の舞踏会で見かけた令嬢ジュリエットと一夜にして恋に落ちる。いがみ合う互いの家柄に恋を阻まれる若き2人はそれでも共にあることを願い奔走するものの、不運なすれ違いにより最終的に2人ともが命を落とし幕引きとなる。

本作はその幸せとは言い難い結末や、作中の情熱的で詩的なセリフが印象的で、『マクベス』、『ハムレット』、『リア王』などの作品と並んでシェイクスピアの代表的悲劇作品として世に広く知られている。現代においても戯曲、演劇、映画など様々な形態で幾度となく各国で親しまれており、公表からこれだけ長きにわたり人の目に触れ続けてきた本作は、その知名度においてはシェイクスピアの代表作とも言えるものであり、様々な観点から研究がなされる注目度の高い研究分野である。

本作の特徴に関する研究に関しては、桑山(2009)のように、運命を強く意識させるようなその物語構成について言及し「「運命」の流れを描きながらも、他方で自由意志としての恋愛を十全に描いていること」と述べているようなものもあれば、大島(1980)のように、本作を単なる叙情豊かなロマンスとしてではなく「二人の若者が危険を冒して難を逃れようとするスリルある話もありむしろ娯楽的要素が多い舞台上映に向けた作品」と捉え論じたようなものもあり、その研究はやはり多岐にわたる。

しかし、研究者や専門家による専門的な観点からの本作に関する特徴や解釈と、一般大衆が作品に触れて得る印象や解釈というのは、全く異なるものなのではないだろうか。研究者や専門家による作品の印象や解釈に関する研究の必要性はさることながら、本作はそもそも大衆に向けて書かれ、演劇などで上演されてきたものであり、一般大衆の感じたところに意識を向けた研究もまた必要不可欠である。ところが、そのような観点からなされた本作についての研究はまだ決して例が多いとは言えない。そのため、本研究では『ロミオとジュリエット』という作品の内側ではなく、その外側に立つ観客、すなわち一般大衆の本作に対する印象・解釈に着目をした。戯曲として文字に起こされた本作を読み、人々は何を感じるのか、400年以上前に書かれた戯曲を読み、現代人は何を考えるのだろうか。本研究では、webの読書サイトに投稿された感想文を通して、現代の人々への『ロミオとジュリエット』の届き方について検討を行う。

2. 目的

本研究の目的は、webの読書サイトにある『ロミオとジュリエット』の戯曲を読んだ様々な人々の感想文から、この作品が現代の日本人にどう受け止められてきたのかを探ること

である。『ロミオとジュリエット』という作品が戯曲として読まれ人々にどのような印象を与え、どのように解釈されここまで長く広く世に親しまれているのか、仮説を元に検討する。

2.1 仮説

筆者は本研究において次のように仮説を立てた。それは、現代の人々においても『ロミオとジュリエット』の戯曲は悲劇的な話として率直に受け取られ、その印象を人々は最も強く感じているということである。

この物語において印象的なのは必ずしもその悲劇的な結末だけではない。もちろんその結末部分が有名な作品であるのは否めないが、例えばロミオとジュリエットが猛スピードで恋に落ちる様だって十分印象的なわけであるし、知名度で言えばジュリエットがバルコニーで「あなたはどうしてロミオなの」と嘆く場面だって負けてはいないだろう。つまりこの作品の見どころが悲劇的な結末だけではないということもまた確かなのである。それでもやはり本作は悲劇的な話としてその存在が世に浸透しているもので、作品を実際に読む前から植え付けられているそのイメージは根強く人々の心に残るものであると考える。

そのため、結局のところ物語の如何に関わらずこの作品に対しては額面通り悲劇的な印象を読後も持つ人が多数であろうと筆者は考える。

3. 方法

3.1 分析対象

本研究では、インターネット上で検索をかけてヒットした 2 人の異なる訳者による『ロミオとジュリエット』それぞれの戯曲について、感想が投稿された 2 種類の web サイトにある感想文を分析対象とした。

まず、新潮文庫から出版されている中野好夫氏による訳書(中野訳, 1951)については web サイト「読書メーター」の 2003 年 10 月 29 日～2022 年 5 月 22 日までの感想文 565 件、「ブクログ」の 2005 年 10 月 2 日～2022 年 4 月 3 日までの感想文 169 件を分析対象とした。

次に、ちくま文庫から出版されている松岡和子氏による訳書(松岡訳, 1996)については web サイト「読書メーター」の 2009 年 11 月 7 日～2022 年 5 月 19 日までの感想文 127 件を分析対象とした。

「読書メーター」、「ブクログ」の 2 つのサイトはいずれも、ユーザーが自身の読書記録をサイト上に残して自分の読書量や内容を管理・把握したり、サイトにアップされた他のユーザーの様々な読書感想文を読んだり、自身で読んだ作品の感想文を投稿したりできる web サイトである。これらのサイトには、様々なユーザーがハンドルネームを用いて自由に作品について述べた感想が数多く掲載されており、『ロミオとジュリエット』の戯曲についても両サイトでそれぞれ 100～500 件近く感想が投稿されていた。

上記データを取りあげた理由としては、これらの web サイトには『ロミオとジュリエッ

ト』の戯曲、なかでも松岡和子訳と中野好夫訳という特定の刊行物に対する人々の多種多様な感想が自由にかつ一定数投稿されており、戯曲を読んだ人々の率直な声が掲載されている点で非常に有益なデータであると判断したということが挙げられる。

3.2 分析方法

これら戯曲「ロミオとジュリエット」の読書感想文データをテキスト化し、Text Mining Studio Ver. 7.1.1により、テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析をおこなった。読書感想文のデータはwebサイトの構成に従い、投稿された感想文1つを1行として入力した。

分析は、テキストの基本統計量、単語頻度解析、ことばネットワーク、特徴表現抽出の順に行った。

3.3 倫理的配慮

本研究で使用したデータは、すでに公表されているwebサイト上に投稿された文章を用いており、また個人情報に関するデータは使用していないため、著作権に関して出典等を明記する以外は倫理的に配慮する必要はない。

4. 結果

4.1 基本情報

表1は戯曲「ロミオとジュリエット」の読書感想文データの基本情報である。総行数は分析対象感想文の総数を表しており、848個であった。感想文一つ当たりの文字数を表す平均行長は133.9文字であった。総文章数は4014文で、平均文章長は28.3文字であった。

さらに、本研究では感想文データを各感想文の内容により「説明型」「直感型」「中間型」「その他」4種のグループに分類して分析を行った。分類は筆者の主観に基づき、主に文章の質が高く長さのあるものを「説明型」、文章の質が低く短いものを「直感型」、ある程度の質の高さと長さのあるものを「中間型」とした。また、次のような感想文は「その他」に分類した。①投稿者同士が感想文投稿欄を掲示板のように用いて会話を交わしているような文章。②物語のあらすじを述べているのみで、読者自身の感想が全く含まれていない文章。③記号のみ、あるいは1文字のみなどで単語として読み取れるものがない文章。

表1 基本情報

	項目	値
1	総行数	848
2	平均行長(文字数)	133.9
3	総文章数	4014
4	平均文章長(文字数)	28.3
5	延べ単語数	24363
6	単語種別数	5990

4.2 単語頻度解析

表2 単語頻度解析 (回数)

	単語	品詞	品詞詳細	頻度
1	読む	動詞	一般	430
2	ロミオ	名詞	固有名詞人名	411
3	ジュリエット	名詞	固有名詞人名	385
4	思う	動詞	一般	320
5	悲劇	名詞	一般	210
6	恋	名詞	サ変可能	195
7	シェイクスピア	名詞	固有名詞人名	180
8	知る	動詞	一般	159
9	良い	形容詞	一般	150
10	作品	名詞	一般	149
11	いう	動詞	一般	138
12	話	名詞	サ変可能	133
13	有名	形容動詞	一般	130
14	面白い	形容詞	一般	115
15	物語	名詞	一般	101
16	知る+ない	動詞	一般	92
17	人	名詞	一般	89
18	舞台	名詞	一般	89
19	愛	名詞	一般	85
20	感じる	動詞	一般	85

読書感想文全 848 個において、出現回数の多い上位 20 位の単語は表 2 の通りである。最も頻度が高かったのは「読む」であり、読書感想文というデータの性質上、戯曲を読んで何かしら感じたことを感想文として書く上でこの言葉が多く用いられていた。

次いで「ロミオ」それから「ジュリエット」という単語に関して、前者がやや多いもののほぼ同頻度で用いられていたが、戯曲の題にもなっているこの主要キャラクター兩名についてはやはり言及する人が多く、多く関心が寄せられていた。

続いて出現頻度の高かった「思う」という単語は、最も出現頻度の高かった「読む」同様感想文というデータの性質が強く反映されたものであり、戯曲を読んで考えたことや感じたことを読者が述べる際に高い頻度で用いられていた。

4.2.1 読者の感情に焦点を当てた単語頻度解析

表 3 読者の感情に関する単語頻度 (回数)

	単語	品詞	品詞詳細	頻度
1	良い	形容詞	一般	150
2	有名	形容動詞	一般	130
3	面白い	形容詞	一般	115
4	多い	形容詞	一般	72
5	すごい	形容詞	一般	55
6	哀しい	形容詞	一般	51
7	美しい	形容詞	一般	49
8	好き	形容動詞	一般	48
9	若い	形容詞	一般	41
10	難しい	形容詞	一般	28
11	意外	形容動詞	一般	26
12	激しい	形容詞	一般	25
13	強い	形容詞	一般	20
14	素晴らしい	形容詞	一般	20
15	苦勞	名詞	サ変形容動詞可能	19
16	別	名詞	形容動詞可能	19
17	個人的	形容動詞	一般	17
18	悲劇的	形容動詞	一般	17
19	興味深い	形容詞	一般	16
20	深い	形容詞	一般	16

戯曲の感想文に出現する単語の内、読者の感情との繋がりが深いと思われる単語に着目し、検索を「形容詞 一般」、「形容詞 非自立可能」、「形容動詞 一般」、「形容動詞 タリ活用」、「名詞 サ変形容動詞可能」「名詞 形容動詞可能」に限定し解析を行ったところ、上位に挙がったのは「良い」、「有名」、「面白い」などと比較的ポジティブな意味をもつ単語が多かった。

「良い」に次いで出現頻度が高かった「有名」は、本作品自体について使われていることもあれば本作のあるシーンや結末について使われることもあり、いずれにしても本作は知名度が高くその点で読者の関心を集めていることが分かる。

続いて多かった「面白い」は前に「思ったより」や「意外と」といった言葉が付いて用いられることが多く、期待を超える面白さを感じた読者が一定数いたということが分かる。

一方でネガティブな意味を持つ単語は全体的に見ても出現頻度として多くなく、出現頻度が高い順に「哀しい」、「難しい」、「悲劇的」などが挙げられる。「哀しい」や「悲劇的」という単語は結末について、「難しい」は翻訳のされ方や洒落、言葉遣いについての感想の中で主に登場しており、さらに中野訳の感想文でのみ用いられていた。

上記の結果から、感想文全体で見ると「何がよかった」、「何が面白かった」という文章構成がとられることが多いということが分かる。

4.2.2 読者の関心が高い名詞についての単語頻度解析

表4 読者の関心が高い名詞についての単語頻度(回数)

	単語	品詞	品詞詳細	頻度
1	ロミオ	名詞	固有名詞人名	290
2	ジュリエット	名詞	固有名詞人名	272
3	悲劇	名詞	一般	170
4	シェイクスピア	名詞	固有名詞人名	161
5	作品	名詞	一般	125
6	物語	名詞	一般	85
7	愛	名詞	一般	78
8	舞台	名詞	一般	74
9	セリフ	名詞	一般	73
10	人	名詞	一般	73
11	本	名詞	一般	63
12	台詞	名詞	一般	59
13	結末	名詞	一般	57
14	映画	名詞	一般	53
15	言葉	名詞	一般	49
16	感じ	名詞	一般	48
17	戯曲	名詞	一般	48
18	内容	名詞	一般	48
19	ストーリー	名詞	一般	47
20	運命	名詞	一般	46

感想文において読者が作中のどのような物事を話題にしているのかを調べるため、検索を「名詞 一般」、「名詞 固有名詞」、「名詞 固有名詞人名」に限定し回数を調べた。

出現頻度が最も高かったのは「ロミオ」で 411 回、次いで「ジュリエット」が 385 回であった。物語の主演 2 名の人物名ということでそれぞれ話題に挙がるが多かったが、それだけでなく「ロミオとジュリエット」という作品名として 2 つの単語が一緒に用いられていることも多くあった。

さらに単語出現頻度が高い順に「悲劇」210 回、「シェイクスピア」180 回、「作品」149 回、「物語」101 回、「人」「舞台」が同率 89 回、「愛」85 回、「セリフ」82 回が上位 10 位という結果であった。

読者の感情に着目した単語頻度解析とは異なり「悲劇」というネガティブな単語が高い頻度で出現しているが、これは「悲劇ではあるが」や「悲劇かと思っていたが」という使い方をされているケースも数件あり、必ずしも作品について断定的に用いられているわけではなかった。

4.3 ことばネットワーク

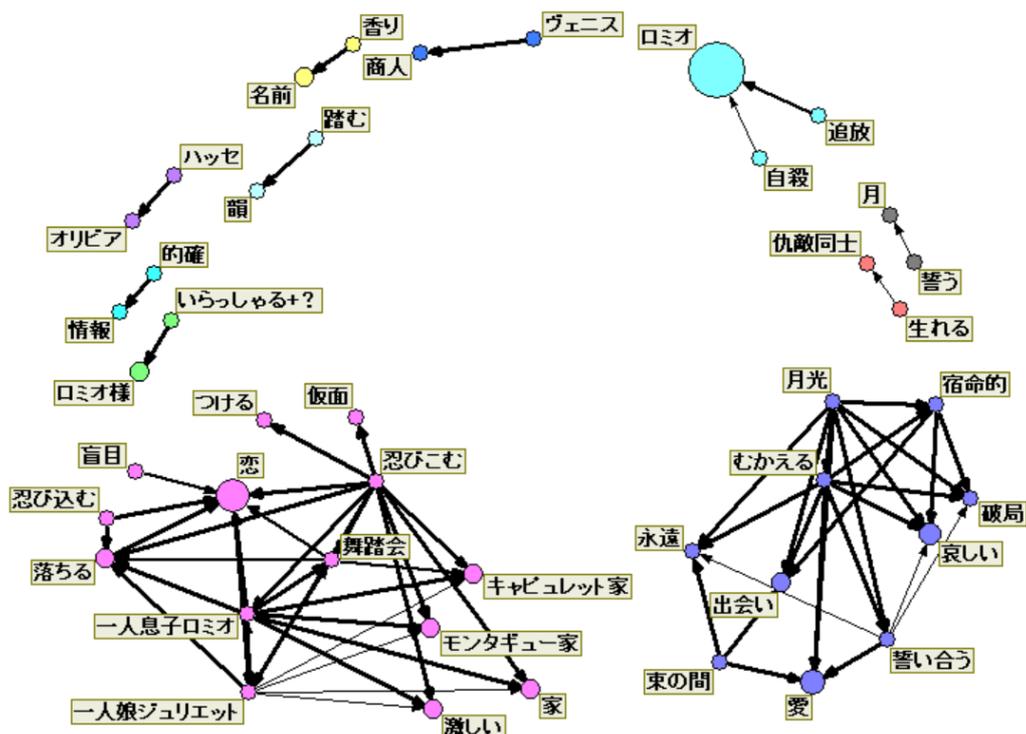
複数のことばからなる意味的なかたまりを分析することにより、読者の話でどのようなことが話題になっているかを明らかにした。

図 1 より、読者たちの中ではロミオとジュリエットの「恋」や 2 人の束の間の「愛」に関

する話題が多く語られていたことが明らかになった。「愛」のまとまりでは「破局」「哀しい」「宿命的」などのネガティブな言葉が多く、「むかえる」という言葉もあるように結末について話題になっている一方で、「恋」のまとまりの方には「舞踏会」「忍び込む」「落ちる」などロミオとジュリエットが出会った序盤のシーンについて話題になっており、出会いと別れという対極の部分に読者は高い関心をもっていたということが読み取れる。

また、「恋」のまとまりからは外れているが「香り」「名前」の繋がりについても、物語序盤のロミオとジュリエットが出会って間もない頃のセリフについての言及であった。敵対する家の人間であるロミオに対してジュリエットが「バラの花は別の名で呼ばれてもその香りは変わらないのだから、私のために名前を捨てて」と独り言ちる場面だが、その言い回しがロマンチックで良いというような意見が見られた。

図1 読書感想文で話題となっている言葉



4.4 特徴表現抽出

読書感想文を内容分類したグループごとに特徴的な表現を抽出したところ、図2、図3、図4のようになった。なお、その他に関しては意味のある結果が認められなかったため除外している。

まず、中間型グループの読書感想文の特徴表現を抽出したところ図2のようになった。このグループでは「本ー読む」という表現が最も特徴的で、「有名すぎて知った気になっていたが、本を読んでみるとこんな感じだったのか」というような単に「この作品を読んで」という意味で用いられていることもあれば、舞台や映画で観た経験との比較として「本で読んでみるとこう感じた」という書き方で用いられている場合もあった。次いで特徴的だった表現は同率で5つあり、このうち「原作ー読む」「舞台ー見る」に関しては先ほど述べた「本ー読む」と同様の用いられ方であったが、「舞台ー見る」については「舞台では見たことがあるが本を読むのは初めて」という本作を読む上でのその読者の前提のような用いられ方と、「本を読んだ結果、舞台で見た方がいいように感じた」というような本作の読後に生じた読者の考えを述べるための用いられ方とははっきり分かれていたのが特徴的であった。また、「ロミオー殺す」については「ロミオが人殺しだったとは意外」というような意見が、「悲劇ーいう」については「悲劇というより喜劇」「悲劇というより恋愛劇」と本作の悲劇的なイメージを否定するような意見が見られた。

次に、直感型グループの読書感想文の特徴表現を抽出したところ図3のようになった。このグループでは特徴表現に偏りがあり、最も特徴的であった「ストーリーー知る」という表現から、2番目に特徴的であった「あらすじー知る」、3番目に特徴的だった「内容ー知る」、4番目に特徴的であった「結末ー知る」の表現まで全て同じ「名詞ー知る」の組み合わせであり感想文での用いられ方も似通っていた。感想文内での用いられ方としては、「ストーリーーは知っていたが切ない終わり方だった」、「あらすじは知っていたが楽しめた」、「内容を知っていても改めて読むと見えてくるものもあった」、「結末を知っていても切なかった」など知識を持って読んだ上で期待を越える何かがあったというような記述が一定数あった。

最後に説明型グループの読書感想文の特徴表現を抽出したところ図4のようになった。このグループでは「戯曲ー読む」、「シェイクスピアー読む」が同率で最も特徴的な表現であった。この「名詞ー読む」の組み合わせは、中間型のグループの最も特徴的な表現「本ー読む」と同じ形で、ようするに『ロミオとジュリエット』の戯曲である本作品を「本」と言っているか「戯曲」と言っているかの表現の違いである。

図2 中間型グループの読書感想文の特徴表現抽出

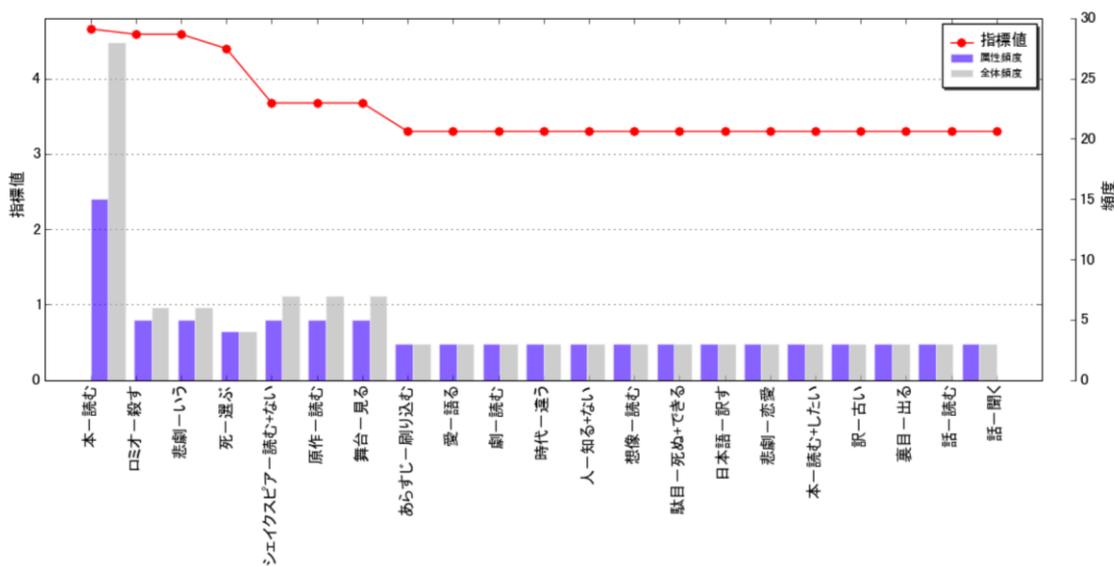


図3 直感型グループの読書感想文の特徴表現抽出

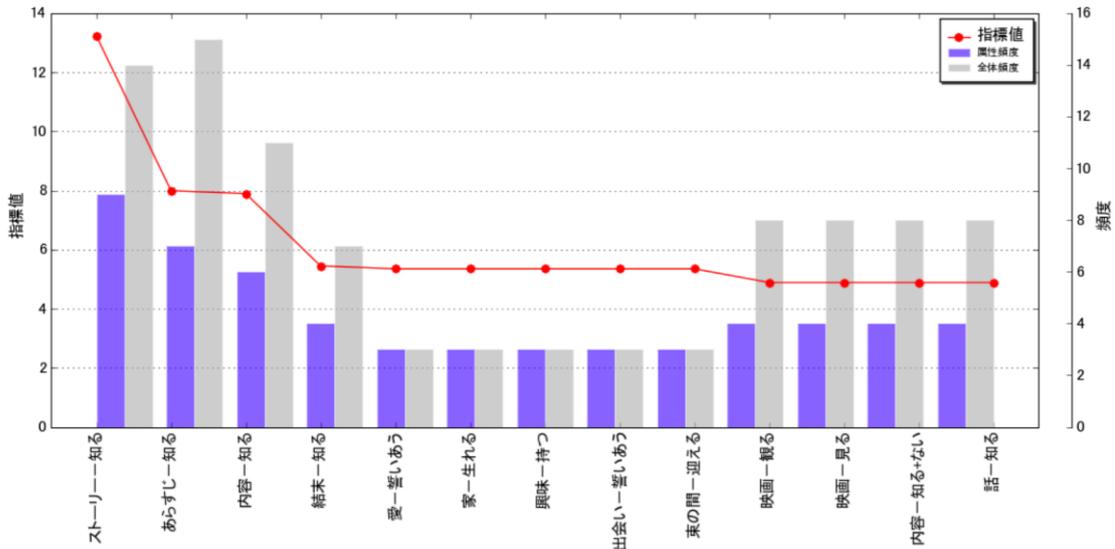
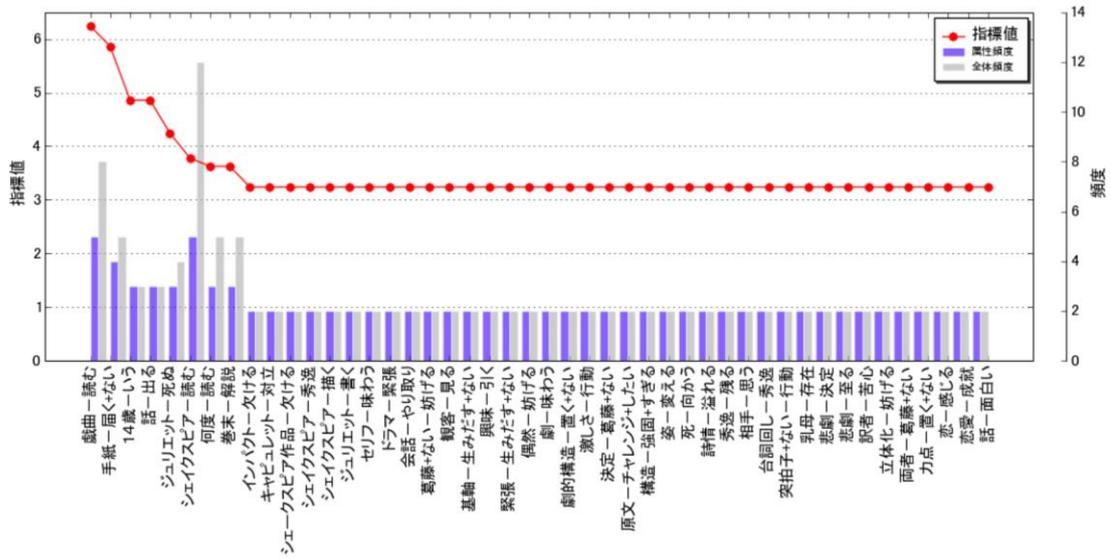


図4 説明型グループの読書感想文の特徴表現抽出



5. 考察

まず、単語頻度解析の結果からは「読む」「思う」などは読書感想文という文章の性質上どうしても使用頻度が高くなる単語であるということが分かった。加えて物語の主役である「ロミオ」と「ジュリエット」も全体の単語頻度解析で上位に挙がっているが、作中での登場頻度が高い人物であることや、本作のタイトルにもなっている単語であることから読者が話題に挙げる頻度が高いことには納得がいく。

また、読者の感情に焦点を当てた単語頻度解析では「良い」、「有名」、「面白い」などと比

較的ポジティブな意味をもつ単語、読者の関心が高い名詞に焦点を当てた単語頻度解析では「ロミオ」、「ジュリエット」、「悲劇」が上位に挙がっていた。このことから、読者は有名な本作について悲劇としての認識を強く持ちながらも、その中に意外な面白さを感じ読了後に前向きな感情をある程度抱いていたことが明らかになった。

次に、ことばネットワークの結果から、まず読者はロミオとジュリエットが出会った序盤のシーンで2人が「恋」に気づく様子について「舞踏会」、「忍び込む」、「落ちる」などの単語を用い話題に挙げていたことがわかった。一方で、ロミオとジュリエットが辿る結末で「愛」が死によって束の間が終わってしまうさまについても「破局」、「哀しい」、「宿命的」、「むかえる」などの単語を用いて話題に挙げており、出会いと別れという物語の正反対に位置する大きな出来事について読者が高い関心を持っていたことが明らかになった。

ロミオとジュリエットの別れが描かれる終盤はおそらく作中でも1, 2を争い有名な部分であるため、読者の関心を集めることは想像に難くなかったが、序盤の出会いの部分も同等に読者の感想文で話題になっていたというのは意外な結果であった。

そして、特徴表現抽出では読書感想文「説明型」、「中間型」、「直感型」の3グループそれぞれにおける特徴的な表現を抽出した結果、グループによって使用頻度の高い特徴表現に異なる傾向があることがわかった。

まず「中間型」グループでは「本－読む」という表現が最も特徴的で、感想文では、作品を知ってはいたが本を実際に読んでみるとこんな話だったのかと驚いたというような意見を述べる人や、映画や劇で本作に触れたことはあるが本で読むのは初めてで、映画や劇と本とを比べての感想を述べる人が一定数いるということが明らかになった。

続いて「直感型」グループでは最も特徴的だった表現から順に「ストーリー－知る」、「あらすじ－知る」、「内容－知る」、「結末－知る」と「名詞－知る」の組み合わせが多くあった。中でも「あらすじは知っていたが楽しめた」、「結末を知っていても切なかった」など知識を持って読んだ上で期待を越える何かがあったというような記述が一定数あり、本作の知名度の高さが窺えた。

最後に「説明型」のグループでは「戯曲－読む」、「シェイクスピア－読む」が同率で最も特徴的で、これは中間型グループの最も特徴的表現である「本－読む」と同じ「名詞－読む」の形であったことから、感想文のグループ分類に関わらず、戯曲の感想文というデータの性質上用いられることの多い表現方法であったのだろうと推測される。

6. おわりに

本研究では、webの読書サイトに投稿された感想文を通して、現代の人々への『ロミオとジュリエット』の届き方について検討を行うことを目的として考察を行ってきた。この目的を検討するにあたり筆者は、現代の人々においても『ロミオとジュリエット』の戯曲は悲劇的な話として率直に受け取られ、その印象を人々は最も強く感じているという仮説を立てた。今回テキストマイニングの手法により読書感想文の分析を様々な角度から行い、結論と

して、本作をただ悲劇的なだけの話と語る読者が圧倒的多数ではないということが明らかになった。

悲劇として有名な話であるためその印象を持って物語を読み始める人が多く、読み進めていく上でもロミオとジュリエットに降りかかる数々の不運に「悲劇的」なものを感じる人が大多数であったことは確かである。しかしそれと同等に、2人の束の間の恋路にロマンチックさを感じる読者や、作中のコメディ的要素やテンポの良さにいくらかの喜劇性を感じる読者もまた多数いたのだ。

『ロミオとジュリエット』が悲劇であることは揺るぎない事実である。しかしそれは、劇作品としての本作がそのように分類され定義されているからという意味であって、本作に触れた読者が必ずしもその分類分けに倣った印象を抱くわけではない。いくら専門家の中で悲劇と定義されている物語であっても、それを喜劇と言う読者もいれば恋愛劇と言う読者もいる。同じ文章を読んでいても、それを悲しいと感じる人もいれば楽しいと感じる人もいるのだ。

筆者は、今回あまりにも有名な悲劇である本作の戯曲の感想文の分析を通して、物語に対する人々の受け止め方の多様性を改めて実感することができた。これからも多様な視点から研究が続けられるであろうこの分野において、テキスト版の『ロミオとジュリエット』に対する現代に生きる人々の印象を明らかにすることができたという点で、本研究は一定の成果を得ることができたのではないだろうか。

7. 謝辞

学生研究奨励賞の原稿作成にあたり、Text Mining Studio を使用させていただきました株式会社NTT データ数理システム様に感謝いたします。また、ご多忙の中、指導して下さいました和光大学の小松賢亮准教授ならびに伊藤武彦名誉教授に心より感謝いたします。最後に、本研究に使用させて頂いた web サイト読書メーターならびにブグログ、そしてサイト内の読書感想文投稿者の皆様に感謝いたします。

8. 文献

ブグログ (2005). ロミオとジュリエット (新潮文庫). Retrieved Jun 12, 2022 from https://booklog.jp/item/1/4102020012?page=1&perpage=30&rating=0&is_read_more=2&sort=2.

読書メーター (2003). ロミオとジュリエット (新潮文庫). Retrieved Jun 12, 2022 from <https://bookmeter.com/books/534832?page=1>.

読書メーター (2009). シェイクスピア全集 (2) ロミオとジュリエット (ちくま文庫). Retrieved Jun 12, 2022 from <https://bookmeter.com/books/1105>.

桑山智成 (2009). 『ロミオとジュリエット』のプロローグにおけるシェイクスピアの劇作術: 「運命」と「情熱」の表象について. 神戸大学文学部紀要. 36, 95-118.

大島芳材 (1980). 「ロミオとジュリエット」の悲劇について. 立正大学人文科学研究所年報.
17, 18-23.